

## 「いい授業をする」から「子どもに力をつける授業」へ

「教師はいい授業をすればいいのだ。いい授業さえすれば、子どもたちには力がつく。1000時間の授業をとにかく1時間でもよい授業にしてやるぞ」とわたしは思っていました。

だから、「いいとこ取り」で多くの著名な実践家の本を読み、論文を読み、追試し、「子どもの食いつく授業」を目指しました。

さて、あるとき私は旭川のとある学校の研究会にでました。

正直に書きます。

本当に今思えば愚かなのですが、「どうってことない授業」だと思ったのです。

しかし、私は愕然としました。

それは、子どもたちがとても育っているということです。

発表の仕方、表現の仕方、辞書のひき方、どれひとつとっても自分のクラスの子どもたちとは違うのでした。

その時、私は初めて気がついたのです。

いい授業をすれば、自然と子どもに力がつくというわけではない。

そりゃあつまらない授業を毎時間するよりは、いい授業、楽しい授業の方がずっといいのです。

しかし、それだけでは何かが足りないと、私はその時初めて気がついたのです。

それではどのような手だてが必要かという.....

第1に、3 / 20の学級の状態をできるだけ具体的にイメージできること。

つまり、学級の最終段階、完成像をイメージできるということです。

その上で、第2に最終状態を達成するためのスモールステップを時期ごとに配置して、実践できるということです。

例えば、私の学級の最終像は例えば話し合い活動においては、「教師が口を挟まなくても自分たちで45分間討論ができる」ということです。

私は、この像にむかって次のようなスモールステップを刻みます。

人前で臆せず話ができる 体育館でステージの上から一人一人に大声でスピーチさせる。

音読がなめらかにできる 毎時間必ず音読し褒める。

緊張の中で発言する 音読テスト。

たくさんの方に気がつく 絵を見て10書く。

気がついたことをどんなことでも発表できる ひとつ書いたら持ってこさせてとにかく褒める。

自分の立場を表明する か×か書かせる。

理由を付けて意見が言える か×かの後に理由を書ける。

まだまだありますがきりがありません。これをどの教科においても貫いて行うわけです。

そうすることで、子供達を意識的に育てることができます。

